
幽霊との生活

うさたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊との生活

【著者名】

IZUMI-D

つやたかづ
ひろひろ

【あらすじ】

3年前に西坂高校で自殺した川村由紀は幽霊だが特異な存在の見える靈だった。自殺から3年後同じ高校に通うことになっている佐々木恭平と出会い。

第1話 住みついた悪靈

どこまでも続く空。

この空を飛ぶ鳥。

少女は学校の屋上にいた。

年齢は16、長めの黒髪がとてもきれいで顔は美人といつより可愛く幼かつた。

少女は屋上のフェンスの外に立っている。あと一步で落ちてしまつような場所に…

鳥は飛べるのに何故人間は飛べないのだろう?

鳥を見つめる少女はつぶやいた。

「私も飛びたい。この地上から逃げたい。」

それが少女の最後の言葉だった。

ただいま私佐々木恭平さざきひやうへいは下り坂を自転車で急いで下りています。

なぜ急いでるか?門限に間にあわないからだ。

門限は9時、その後の外出は許可をとるつて中学生かよ…

オレはピチピチの中学生から高校生になる輝かしい春休みを過ぐしている。

あと少しで間に合つ。このまま何もなければ…

しかし願望むなしく何かが起こつてしまつた。

公園の木で死角となつている曲がり角から人がでてきた。

ヤバい…

ブレー キをかける。

止まつた?何事もなく。

びっくりした。もうダメだと思ったから。

ああ謝らないと…

顔を見上げたときそこには先程の人はいなかつた。

「瞬間移動？」

状況がわからない。もしかしたら幻だったのかも知れない。
瞬間移動の答えは後ろのほうからきた。

「こつち。」

女の子の声。

振り向くと先程の人と同じ色の服、間違いなくひきそうになつた人
だ。

「なんで後ろに…」

その少女は見た目中学生、やや長めの黒髪、なぜか笑つている。
笑顔が可愛い…ってそれどころじゃない。

「見てなかつたの？今ウチの体通り抜けて行つたんよ。」
何を言つてゐるんだこの女。

「む、信じてないなあ。」

次の瞬間ナイフをとりだし上へと投げた。

「あぶねえぞ！…」

しかし少女はよける気はないようだ。

ザン…

ナイフは地面に突き刺さつた。たしかによけていなかつた。
「ウチはね、幽霊なの。触りたいと思わないと触れないし、死ぬこ
ともない。」

はあ…

状況がわからない。視線を逃がすと公園の時計が目にはいつた。 9
時をさしている。

間に合わなかつた…

「わけわかんないけど、忙しいんで。」

そう言つてその場から立ち去ろうとした。

「まつて、あなたの家にと…」

少女の声はそこから聞こえなくなつた。

「ただいま。」

家の扉を開けると怒った顔の主婦（母）が出迎えてくれた。

「うげ……」

「うげ、じゃない。3分遅刻。」

3分くらいよくないか？

いや、この人は多分家の鍵をかけようとしていたはずだ。鬼みたいな人だから。

「家があるだけ感謝しなさい。最近は近所の公園に女の子がずっと居るって噂もあるんだから。」

絶対あいつだよ。

そういうえば、あなたの家にと……つて。

泊めてほしいってことか？

幽霊なのにか。

「じめん、母さん公園に忘れ物してきた。」

「ちよつと。」

ああまた怒られるなあ。

なぜかオレはあの少女のところへ行ってしまった。

「ただいま。」

さつきより恐ろしい顔の母親が待っていた。

「あんた夜中にうろうろしてたら……」

どうやら母はオレの後ろの人物に気づいたようだ。オレはあの公園にいた幽霊少女を連れてきた。さつきの言葉はやはり泊めてほしいといつていたみたいだった。

「実は高校の友達で最近両親が海外出張みたいで。」

めいいっぱいの言い訳をしたつもりだったがこれ以上無理だ。しかし母は意外な言葉を口にした。

「その子、幽霊でしょう。」

「なんで…」

「どうやつたら幽霊つて見抜けるんだよ。

「実は私、霊能力者なの。」

「嘘だろ。」

「まあとりあえず名前は？」

「そういう名前聞いてなかつたな。

「川村由紀。」

「由紀ちゃんね。私は結芽よ、よろしく。」

川村由紀どつかで聞いた名前だな。芸能人か？

いや死んでる人間だつたな。

「とりあえず部屋を用意するには明日までかかりそつだから、とりあえず2人で寝なさい。」

「はあ？ 今日だけじや…」

「幽靈さんだから別によくない？ とりあえずあんたは風呂入つてきなさい。」

とりあえず風呂に入ることにした。

「なんでウチが幽霊やてわかつたんですか。」

由紀が尋ねる。

結芽は恭平が風呂に入ったのを確認して小さな声で言った。

「3年前、西坂高校1年の川村由紀という生徒が自殺。その人にそつくりだから。」

西坂高校はここ隣町にある。

「近所で噂になつてたわよ、公園に自殺の子に似た人がいるつて。そういうつて結芽は紙を出した。

「これが家にすむ条件ね。」

紙の内容はこれだ。

- ・あなたは私の友達の子供で佐々木家にお世話をなつていてる。
- ・春休みが終わつたら恭平がもうすぐ通う西坂高校と一緒に通う。
- ・恭平と仲良く過ごす。

由紀はこの紙を見て驚いた。

「これ…」

「あつ、じめん。いとこにしてあげよつてもすぐばれそりだからね。

」

「いえ、そこじゃなくて。西坂高校。」

「幽靈だから自殺できないでしょ。それにもつ一度人生を楽しめた
めにね。」

またあの学校に。

でもあれから3年たつてる。

大丈夫だろう。

その晩恭平はベッドが横にあるのに床に寝ていた。
しかしあの由紀って幽靈はなんなんだ。

普通に見えるし、ご飯食べてたし。

普通の人間と違うのは死なないこと、触るひとつと思わないと物に触
ないことくらいだ。
てこうか…

「てめえいい加減寝ろよーー！」

由紀はテレビを見ている。

「だつて久しぶりのテレビやもん。ウチ、テレビ好きやし。」

はあ、もう2時だぞ。

「あとウチのことは由紀って呼んでな。ウチはキョーチャンつて呼
んだるから。」

母に何を言われたか知らんが。人のベッドは取るし、テレビずっと
見てるし、なれなれしいし。
こりや悪靈だな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1501d/>

幽霊との生活

2011年2月1日14時54分発行